

被災地のバツセン②

気仙沼フェニックスバッティングセンター

宮城県気仙沼市

津波による大規模火災の発生した宮城県気仙沼市で、野球が復興のシンボルになりつつある。家族7人を失った千葉清英さん(43)牛乳販売会社(宮)と瑛太君(12)親子が、バッティングセンター建設に向け活動している。賛同の声は地元のみならず全国に広がり、新聞やテレビも競うように報じたので、目にした人も多いことと思う。だが、「ここで被災地のいい話を追隨して取り上げるつもりはない。肉親をなくし、住む場所を奪われた親子が、絶望の中でも失わなかった野球への思いを聞きたくて、気仙沼へ向かった。」

(バッティングセンター研究者・吉岡雅史)

た とえ津波が再び襲って来ても心配のない高台に、建設予定地はある。「この先真っ暗という人はいっぱいいる。今はせめて、大人も声を出して騒げる場所が必要なんです。決して野球をやっている人たちのためだけじゃない」と、千葉さんは真意を話した。

センターを見かけると、ふらっと立ち寄った。久しぶりにバットを振った満足感、汗を流した充実感がよみがえる。「お父さん、楽しかったね」「うん」「でも、遠いね」「そっだね」。車で1時間半の距離だった。

2 年前の3月11日、港から400mの地点にあった自宅兼事務所津波が迫った。先に避難した妻・美奈子さん、6歳と3歳の娘、義父母、それに美奈子さんの妹とその息子の肉親7人が、犠牲に

なった。遅れて避難した千葉さんは、橋の欄干にしがみつき、奇跡的に助かった。小学校にいた瑛太君も無事だったが、親子が対面できたのは3日後だった。

東京出身の千葉さんは、今から10年前に東京での勤めをやめ、義父の商売である牛乳販売業を継ぐため、気仙沼に移住。コツコツ積み上げてきたものを一瞬の災害で失った。葬儀と会社再建の同時進行で、寝る間もなく働き続ける。そして昨年、会社は創業50年を迎えた。

「地域に恩返しをしたい。それは、家族への思いでもあるんです」。火災で多くの建物が燃え、全長60mの大船が駅前まで流されてきた気仙沼。破壊され尽くした第2の故郷の惨状。それに加え、息子との約束…。「唯一の肉親である私が、ここで約束を守らないと、一生信頼されなくなるんじゃないか。そんな恐れさえ感じました」

ガ レキの処理が進み、プレハブの仮店舗・住宅は少しずつ増えている。しかし仮設住宅が建てられるのは学校や公共のグラウンド。子どもたちが思い切って遊べるスペース、大人が体を動かせる空間はなくなった。

だからこそ、バッティングセン



気仙沼の岩井岬に一本だけ残った松。津波に耐えたその姿から「龍の松」と呼ばれている



津波で市街地に打ち上げられた「第十八共徳丸」(330トン)。気仙沼の津波被害のシンボルだが、撤去が決定

響け命の球音 失われた町に

ングセンターとなれば、少しは貢献できるはず。いざオープンしてから戸惑わないよう、10人余のメンバーの前でひとしきり、バッティングセンターあるあるを披露してきた。

僕が日本国内800カ所以上とどまらず、アメリカやカナダのバッティングセンターにも進出していることを話すと、千葉さんは一瞬間を置いて「3年後目標で、ぜひ一緒に行きましよう。さすが元球児。バッティングセンターを経営しようというだけのことはある。」

「家族をたくさん亡くし、住む場所も職場も失い、まさに人生のどん底にいながら、野球のことを考える当事者の心境を聞きたいのですか?」

答えは明瞭だった。「だって、生まれつつきの野球バカですから」

予想通りのセリフだった。人が前向きに生きるには、夢や希望が必要となる。未曾有の災害に巻き込まれた人なら尚更。千葉さんにとって、それは野球だったのだ。

工事が順調に進めば、お盆明けにもオープンできる見通し。若手県出

ターの出番なのである。

千葉さんは東京都立南野高校3年の夏、エースとして西東京大会ベスト4の原動力となった。「努力すれば成功する」というものでないが、成功する人は、人一倍努力している。厳しい練習を通じ、身に染み込んでいった真理である。

千葉さんはまず、本業を生かしてオリジナルの『希望の飲むヨーグルト』を製造。阪神淡路大震災の被災者らがこれを知ると、各地での復興イベントや講演に招かれるようになり、千葉さん親子の知名度は全国区に。

「バッティングセンターばかり取り上げられますけど、牛乳販売がある所かになっては、何をやってるんだ、ってなりますから」

だから千葉さんは「バッティングセンターの収益はすべて、地元のために使います」と宣言。その思いと覚悟に支援者は増え、NPOが立ち上がるまでに発展した。



バッティングセンターの実現に奔走する千葉さん。飲むヨーグルトの売り上げも建設費に充てられる

身で、プロ野球ヤクルトの畠山和洋選手が働きかけ、ヤクルト球団が道具の支援に名乗りを上げてくれた。大リーグで活躍中の岩隈久志投手も、渡米前は東北楽天大所属。「オフには駆けつけたい」と話しているという。

千葉さん親子の夢は、気仙沼の希望となって舞い上がる。屋号のごとく、不死鳥のよう。

